

# 深川での俳句(俳諧)活動

一般に、俳句の活動に専念するために芭蕉は深川に住んだと言われていま  
す。深川移居をきっかけに芭蕉の俳句は変わっていきます。そして「蕉風」と  
呼ばれるような芭蕉独自の俳句の世界をつくりました。

## 「古池や蛙飛こむ水のおと」を詠んだのは深川

貞享3年(1686)春、芭蕉庵では芭蕉をはじめ門人たち約40名が集まって、  
蛙を題材にした句合が行われました。そこで芭蕉の詠んだ句が「古池や蛙飛  
こむ水のおと」でした。



### 深川で詠んだ句

深川の草庵で詠んだ句を紹介します。

茅舎ノ感

芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉

天和元年(1681)吟

《意味》外ではバシヨウに暴風が吹きつける音、庵の中では  
盥に落ちる雨漏りの音を聞き、わびしさを感じるからだ。

草庵

花の雲鐘は上野か浅草歟

貞享4年(1687)吟

《意味》雲もような花盛りの季節、聞こえてくる鐘の音は、  
上野寛永寺か浅草寺か。

蓑虫の音を聞に来よ草の庵

貞享4年(1687)吟

《意味》蓑虫の鳴く声を草庵まで聞きに来て下さい。

『あつめ句』には「くさの戸ぼそに住みわびて、あき風  
のかなしげなるゆふぐれ、友達のかたへいひつかはし侍る」  
とあり、芭蕉が自分の草庵へ来るように呼びかけています。

草の戸も住替る代ぞひなの家

元禄2年(1689)吟

《意味》私が住んでいた小さな家も、住む人が変わればお  
雛様を飾ったりして、にぎやかな家になるのだろう。

### 深川を詠んだ句

●小名木川五本松

深川の末、五本松といふ所に船をさして

川上とこの川しもや月の友

元禄5、6年吟

《意味》深川の五本松まで舟を出して 小名木川に舟を浮  
かべ、月を眺めているが、この川上にも同じように月を眺  
める風雅の友がいることだろう。

●新大橋

新大橋は元禄6年(1693)、隅田川にかけられま  
した。千住大橋、両国橋に次いで隅田川で3番目に古い  
橋です。元禄5年から6年に工事が始まり、元禄6年末  
に完成しました。芭蕉は、橋の建設中と完成後に句を詠  
んでいます。

深川大橋半かゝりける比

初雪やかかけかゝりたる橋の上

元禄6年(1693)冬吟

前書きから橋が半分ほど出来上がった頃に詠んだことが  
わかります。

新両国の橋かゝりければ

みな出て橋をいたゞく霜路哉

橋の完成後に詠んだ句です。橋に対する人々の感謝の気  
持ちが表れています。この句は、別案「有がたやいたゞひ  
て踏はしの霜」があります。